

年（一六〇〇）九月、石田三成が謀叛を起こした時、増田長盛は西軍に属し、関ヶ原の後方部隊として近江国水口まで出陣した。西軍が敗北したため、長盛が待機していたところ、そこへも徳川家康が討伐に向かう意向を示したので、長盛は種々謝罪の言葉を述べて剃髪し、高野山へ入った。

長盛は大坂より出陣の際、郡山城は要所であるので、自身の騎馬隊約千騎のうち、七百騎は郡山に残し、家臣も大半は残し、関ヶ原へは騎馬隊三百騎を連れて出陣した。これほど多くの軍勢を持つことができたのは代官をつとめていたからであった。そうして郡山は城主が不在となった。長盛は水口より高野山へ入ったとも切腹したともいわれている。あるいは討ち取られたとも島流しの刑に処されたとも種々噂がある。

一、郡山へも東軍の軍勢が押し寄せてくるのであったので、大和国中の百姓は浪人となっていた国侍を大将にし、一揆を起こして郡山へ押し入り、町の出入口をあちこち放火し、あるいは略奪をおこなった。留守の役をしていた家臣達には策がなく、最早これを鎮めることもできず、妙案も出ないように思われた。

それ以前に、渡辺勘兵衛（了）という浪人がいた。彼は秀吉に仕えることを望んでいた。それを聞きつけた増田長盛は、頃合いを見計らって勘兵衛を秀吉に引き合わせるように取り計らおうと考え、勘兵衛に合力米一万俵を与えてひとまず自分の客人として扱い、城の三の丸に滞在させた。それ故、勘兵衛は采配等には関与しない立場であった。しかし勘兵衛は「このようにあれこれと取り乱すことはもつてのほかである。きちんと対処せねばならない」と家臣にいった。家臣は「このように家中が混乱して治まらないなか、まして郷中のことに關しては処置すべき方法がない」と返答した。その時に勘兵衛は「誰も統率するのが困難であるというならば、私が頭領となり、指示をして鎮めてみようではないか」といったので、その発言に家臣は皆同意した。「きつと敵の軍勢もやって来るであろうから籠城戦に定めるのが上策である。そのため、各々の妻子を人質として出すように」と勘兵衛から指示があったので、家臣は人質を取りまとめ、本丸に移し置いた。

それから勘兵衛は軍勢を二、三百人ずつ用意した。方々へ